



TITLE:

遼室君主權の成立に関する一考察

AUTHOR(S):

小川, 裕人

CITATION:

小川, 裕人. 遼室君主權の成立に関する一考察. 東洋史研究 1938, 3(5): 373-400

ISSUE DATE:

1938-06-28

URL:

<https://doi.org/10.14989/145628>

RIGHT:

東洋史研究

第三卷
第五號

昭和十三年六月發行

遼室君主權の成立に關する一考察

小 川 裕 人

一

古來滿洲の地に建てられた國家をその政治組織の上から考察すると、夫餘國と三國時代の高句麗國とが互に近似して居る。その特徴とするところは、君主は既に世襲となつて居るが、その國家組織の中堅を成して居る五部族(王族を併せた)は未だ聯合體的組織を多分に殘存し、被征服種族に對しても、その各部族は各別に排他的な支配權を有して居た。然るに中期以後の高句麗に於いては王權は著しく發達し、諸部族内に於ける氏族制的性質は稀薄となり、その排他的支配權も小範圍となり、貴族も形式的には王の命によつて地方行政の任に當るのであつた。然し世襲貴族の權威は王の權力を制限して絶對的なものとなさず、征服者たる高句麗族も大體に於いて貴族階級としての地位を保持し、主として被征服者より成る下層階級の上に臨むことが出來た。次に渤海の組織も大體中期以後の高句麗とその性質を同じくし、稍これを進展せしめた感がある。

然るにこゝに問題とする遼國はその完成された時代に於いては次の諸項に於いて高句麗にも渤海にも見られな

い特徴を有して居る。

一、絶對君主權の發達、遼室の君主權は、太祖時代より可成り發達したが、世宗以後樞密院の成立、漢人の擡頭等を契機として絶對化された。

二、無封冊帝國の出現、阿保機はその建國當初天皇主を自號するや、國內統制の必要上、後梁に封冊を求めて得られなかつたが、後多くの漢人をその治下に置くに至つて、内部統制にも成功するや、遂に中原國家の封冊なくして即位建元し、支那式の帝號を稱した。これは獨立國家的な自覺の強くなつた證據であるが、更にこれが中原國家に對し對等なる北朝としての自覺となるに至つた。

三、征服者たる契丹人も被征服者（奴婢部曲を除く）たる異種族も原則として平等である。漢人の州縣の建設される他に奚、室韋、達魯統、烏古、敵烈、女直等被征服種族をも契丹人と同様な部族に編成した。斯かる事實は太祖の神冊六年頃には明かに認められるが、絶對君主權の確立された聖宗時代にはこれが遙かに擴大された。

四、官吏貴族の擡頭、君主權の強化と共に世襲貴族は没落し、新に貴族階級となつたものは、遼室一族や外戚の他はその才能によつて官吏に任命され、政權に結び付いた者や、その子孫である。

右の他に高句麗や渤海が漢人住地との交渉を寧ろ自ら避けた感があるのに、遼は積極的にこれに働きかけた點、又前者に於いては貴族間の對立抗爭がその滅亡の内的原因とも見られる。然るに後者は多くの漢人をその組織の中に擁して貴族がその經濟的武力的奉仕に依寄したのみならず、太平の續くに隨ひ國家の重心も亦事實上より多く漢人に置かれるに至り、政權から離れた契丹人は窮迫の一路を辿り、貴族と結び付いた漢人が寧ろ時を得るに至つた。斯くの如くして國家建設の原動力であつた部族人自身の間に貧富の兩階級が生じ、その經濟的相剋によ

つて一般部族人は貧窮化し國家成立の基礎を失ふに至つたことが、遼國滅亡の内的原因の主要なものと思われる。

以上の如く遼國と渤海國以前とは種々の點に於いて相違が認められる。然し遼國も最初より俄かに斯くの如き性質の國家になつたのではない。その當初に於いては夫餘や三國時代の高句麗の如き組織の時代もあり、次には中期以後の高句麗や渤海の如き状態となつた時代もあつたのである。只夫餘や高句麗や渤海が、比較的長く同一状態に停滯して居たのに、契丹は短年月の間に各段階を経過して、遂に前者には見られない國家の完成を見るに至つた。斯くの如く遼國をして比較的早くその過程を辿らしめたものは、その組織の中に主要なものとして先進族なる漢人を多く包含するに至つた事實であらうと思はれる。斯くの如き遼國の政治組織殊に君主權の發達過程を漢人と關聯せしめて考へんとするのが本稿の目的である。

二

遼史(卷三)兵衛志、兵制のところには、

凡舉兵、帝率蕃漢文武臣僚、以青牛白馬、祭告天地、日神、惟不拜月、分命近臣、告太祖以下諸陵及木葉山

神、乃詔諸道徵兵、云々、

とあつて、青牛白馬^①を以て直接祭る對象は、天地日神で、殊に天は第一に置かれ、太祖以下諸陵や木葉山神には、近臣を分遣して告げるのに過ぎない。

又禮志(卷五)皇帝親征儀の條にも

出師必告廟、乃立三神主、祭之、曰先帝、曰道路、曰軍旅、刑青牛白馬以祭天地。

とあつて、青牛白馬を犠牲として祭るのは、主として天地であつたやうである。

更に遼史太祖紀を見ると、太祖即位の第七年五月の條には、諸弟の亂が略平定したことを記した後に

丙寅至庫里、以青牛白馬祭天地、以生口六百、馬二千三百、分賜大小鶻軍。

とあり、又天贊四年閏月のところには、渤海討滅のため親征せることを記し、

壬寅、以青牛白馬祭天地于烏山、

とある。又天顯元年二月の條、渤海を討伐した時の記事にも、

壬辰、以青牛白馬祭天地、大赦改元天顯、以平渤海、遣使報唐

とある。斯くの如く遼代に入つては、青牛白馬の犠牲を以てする祭祀の目的は主として天地を祭るに在つたのであることが分る。

以後遼代を終るまで、全く變りがない。されば契丹建國後に於ける、灰(青)牛白馬の犠牲は、主として天地を祭る手段として用ひられたもので、その祭祀の思想的的主要内容は、天地を祭ることであつたのである。

然らば、斯くの如き形式を有する拜天地の思想が、契丹人の間に行はれたのは、何時頃のことであらうか。單なる原始的な信仰としての崇天思想は、灰(青)牛や白馬を神聖視する思想と共に、可成り古くから存在したであらうことは想像される。然しこれが舉兵・出師・改元の如き政治的事件と結びつき政治統一の原理となつて居るところに、特に興味が存する。

契丹國志初興本末には、契丹の古傳説を記して、

古昔相傳、有男子、乘白馬、浮土河而下、復有一婦人、乘小車、駕灰色之牛、浮潢河而下、過於木葉之山、顧

合流之水、與爲夫婦、此其始祖也、是生八子、各居分地、號八部落、一曰祖作祖^{○一本}、皆利部、二曰一室活部、三曰實活部、四曰納尾部、五曰頻沒部、六曰內會鷄部、七曰集解部、八曰奚喙部、立遺像^{○始祖及}八子[○]于木葉山、後人祭之、必刑白馬殺灰牛、用其始來之物也。

と言つて居る。こゝにも灰牛白馬の信仰が物語られて居るが、この説話に含まれた思想の主要内容を成して居るものは前述の建國後の場合に於けるが如く、拜天の思想ではなく、祖先崇拜の觀念である。而して灰牛白馬や木葉山を信仰する思想も、亦この説話には、顯著に表れて居るが、それは前述の建國後に於けるものと同じく原始的な *naturism* 思想であつて、寧ろ前時代に於ける信仰の殘存とも考へられるのである、さればこの説話の歴史的意義を考察するに際し注意すべきは、その祖先崇拜的な思想内容で、八部の共同祖先の崇拜である點に、特別な意義が感ぜられる。而して單に共同祖先のみならず、八部の各の祖先をも崇拜して居る點も、興味あることと言へよう。前掲契丹國志記載の説話には、立遺像^{○始祖及}八子[○]とあり、又遼史地理志記載のものには、有木葉山、上建契丹始祖廟、奇首可汗在南廟、可敦在北廟、繪塑二聖、并八子神像とあつて、木葉山には始祖のみならず、八部の祖なる八子をも合祀して居た。この八子の合祀は共同始祖崇拜の行はれる以前、既に各部別のその祖先祭祀が行はれて居た名残りではなからうかと考へられる。

既に掲げた契丹國志の記事によつても窺はれる如く契丹の八部はその部大人の一族のみならず、部落全體が同祖より出たものとされて居たのである。又遼史^(卷三)永州の條にも、この傳説を載せて、

相傳、有神人乘白馬、自馬盂山浮土河而東、有天女駕青牛車、由平地松林泛潢河而下、至木葉山二水合流、相遇爲配偶、生八子、其後族屬漸盛分爲八部、每行軍及春秋時祭、必用白馬青牛、示不忘本云。

と記して居る。こゝにも所謂契丹の八部は、契丹の始祖より分れた八子の各の一族の繁殖したもので、契丹人は部族全體が同一始祖より分れたとして居る。さればこの傳説は、金完顔氏の傳説に於けるが如くその部大人家の同源傳説であるばかりでなく、各部族員全體の同源傳説である。斯くの如き同源傳説發生の思想的背景をなして居たものは、各部族内部の同族意識の先在であつたと解される。即ちその各部族には、既に早く同族意識があつたので、この同族意識を基礎として、八部族全體の同源傳説が成立したのではなからうか。即ち斯くの如き同祖傳説を生じた思想的雰圍氣この傳説の存在意義を發揮し得るやうな信仰的素地が、當時の契丹社會に既に存したので、それが背景となつて、この八部同源傳説が生じたのではなからうか。

この想像が許されるならば契丹の八部は各その部内に於いて祖先崇拜的思想を有し、既に早く各部別にその祭祀を行つて居たが、この傳説の成立當時は既に各部別の祖先祭祀のみならず、共同祖先の祭祀が統一的行はれるに至つたことが察せられる。斯く考へると唐初に八部と唐末の八部とが、七部までその名稱の音を類似し、同一名を持續して居た如く推せられることも、必ずしも不可解ではなからう。

唐代の契丹八部の各に就いては二様の名稱が傳へられて居る。一は唐書^(卷二)契丹傳及び冊府元龜^(卷九)外臣部降附の條に見えるものである。即ち冊府元龜によると貞觀二十二年松漠都督府の置かれた時の記事にその屬下の八部として、達稽部峭落州、祈紇便部彈汗州、獨活部無逢州、芬間部羽陵州、突便部日連州、芮奚部徒河州、墜斤部萬丹州、伏部、州二、匹黎、赤山を擧げて居る。他の一は漢高祖實錄以來の五代の歴史に關する史書に記されて居り前掲契丹國志初興本末の説話に見えるものと同じく、即ち旦利皆部、乙室活部、實活部、納尾部、頻沒部、内會鷄部、集解部、奚嗶部である。この兩者を比較すると七部までその音が類似して居る。

達稽……………旦利皆　　紇便……………奚啞

獨活……………實話　　芬問……………頻沒

突便……………納尾　　丙奚……………內會鷄

墜斤……………集解

後者には伏部が無くなつて乙室活部が入つて居る點が著しい相違で他は同一名稱を持續して居た如く見える。

然るに唐初と唐末との間に、契丹の政治的運命には甚だしい激變があつた。阿卜固の亂、李盡忠の亂、可突于の變等があり、又その住地の如きも潢土二河合流地方に復歸したこともあり、又營州(今の朝陽)附近に南下して住したこともあつた。その覇屬關係も、或は唐に羈縻せられ、或は突厥に服したりして、屢大變動があつた。斯くの如き數奇の運命に弄ばれつゝ、その部族名を能く持續し得たとすれば、その同族的結合力の可成り強かつたことが推せられる。たとへその部族が一度紛亂のために分散しても、彼等に若し強い同族意識があつたなら、變亂が治つて社會の平靜が恢復された時、再び主として同族相集つて住し一部族を成すに至ることは想像し得ないことではない。ウラヂミルツ④オフも、古代蒙古の社會に於いて斯くの如き現象のあつたことを認めて居る。

以上の如く考へると唐代中期以前の契丹の八部には、各部族内に於ける同族意識があつたことは略想像して支障なからう。この意識が基礎となつて、契丹全體の同族意識と、共同始祖尊崇の思想が発生したと認め得られ、且つ、それを物語つて居るところに灰牛白馬傳説の歴史的意義が存するのであらう。

然れどもこの契丹人の共同祖先尊崇信仰の存在は、只この傳説を通じてのみ知り得られるので、この傳説以外にその信仰の何時頃より始つたかを示して居る史料は全く存しない。さればこの信仰の行はれ始めた時代を客觀

的に確定し、以てこの傳説の成立年代を直接定めることは甚だ困難な問題である。只こゝに手懸となるのはこの傳説が所謂唐末八部及び三年迭立制と關聯してのみ傳へられて居ることである。

東齊記事に、この始祖傳説と迭立制との關係を記して、

契丹之先、有一男子、乘白馬、一女子駕灰牛、相遇於遼水之上、遂爲夫婦、生八男子、則前史所謂迭爲君長者也、此事得於趙志忠、志忠嘗爲契丹史官、必其真也。

とある。こゝに言ふ前史といふのは、漢高祖實錄や五代會要等、唐末契丹の八部や三年迭立制に就いて記したものを指したのであらう。今漢高祖實錄を見ると

契丹、本姓大賀氏、後分八族、一曰(但)利皆部、二曰乙室活部、三曰實活部、四曰納尾部、五曰頻沒部、六曰內會鷄部、七曰集解部、八曰奚嚙部、管縣四十一、縣有令、八族之長皆號大人、稱刺史、常推一人爲王、建旗鼓以尊之、每三年第其名、以相代。

とある。右の兩記事を參照して考へると、契丹の始祖の八子は、但利皆部、乙室活部、實活部、納尾部、頻沒部、內會鷄部、集解部、奚嚙部等の祖で、その族長が三年迭立の原則によつて、迭に契丹の大酋長となつたのである。

東都事略(卷一二五)にも

初契丹之先、有一男子乘白馬、一女子駕灰牛、相遇於遼水之上、遂爲夫婦、生八男子、一男子即大賀氏也、八子爲八部、一曰但利皆、二曰乙室活、三曰實活、四曰納尾、五曰頻沒、六曰內會雞、七曰集解、八曰奚嚙、部之長號大人、常推一人爲王、得建旗鼓

とあつて始祖傳説と所謂唐末八部の迭立制とは一體となつて物語られて居る。

契丹八部の名は既に貞觀時代より唐人に知られて居たが、これと唐末八部との相違は、既述の如く前者には乙室活部がないが、伏部があり、後者には乙室活部があつて伏部のないことである。契丹の始祖傳説が、この乙室活部を加へた唐末八部と關聯してのみ傳へられて居るとすれば、この傳説の完成は、乙室活部が契丹八部の一として加入して以後のことと考へられる。

乙室活部は舊唐書^(卷三)及唐書^(卷四)等の地理志、帶州及び信州の條に見える乙失活部或は乙失革部と音が類似して居るから、同じものであらうと思はれる。されば五代の史書に見える乙室活部は、帶州信州等の乙室活部が北歸したものと見るのが、妥當であらう。

帶州・信州等は舊唐書^(卷三)地理志によると、天寶戸口の記されて居る點より見て、少くとも天寶初年には幽州界内にその存在を維持して居たこと明らかである。されば乙室活部が契丹八部の中に加つたのは、天寶初年より以前のことでないことは先づ窺はれる。更に詳しく檢すると舊唐書^(卷三)地理志には、自燕以下十七州、皆東北蕃降胡、散諸處幽州界内、以州名羈縻之、無所役屬、安祿山一切驅之寇、寇遂擾中原、至德之後、入據河朔、其部落之名無存者、今記天寶承平之地理焉とある。この舊唐書記載の燕より以下の十七州の中には、帶州信州も含まれて居るが、^④十七史商榷によると、こゝに天寶承平之地理といふのは、天寶十一年に當つて居るやうである。従て乙室活部の北歸は天寶十一年より後のことと見るべきであらう。然るに安祿山の亂は天寶十四年十一月に起つて居る。右の記事によると、この時は安祿山が營州幽州地方の羈縻州を一切これを驅つて中原に寇したといふから、幽州界内に在つた羈縻州の契丹人も、天寶十一年頃から十四年亂の起る頃までに安祿山の勸誘を受けて一部分はこれに従ひ、従はざるものはその壓迫を避けて北歸してしまつたとも見られる。安祿山事迹^(卷下)を見ると

天寶十五年五月奚契丹が北口(今の古北口)から范陽(今の北京)に至り、牛馬子女を刼掠し、城下に止ること累日、時に城中嬴兵數千を留むるのみで、敵することが出来なかつたとあるから、幽州界内に残つて居た奚や契丹人は、この時には全部北歸させられたことであらう。されば乙室活部の北歸は遅くとも天寶十五年五月までには行はれて居たと見るべきである。

斯の如く乙室活部の契丹八部への加入が天寶十一年以後のことであるとすれば、乙室活部を入れた契丹八部に結びつけて傳へられて居る契丹の始祖傳説及び三年迭立制の成立は早くとも天寶十一年以後のことと認められる。而してこの傳説の成立によつて一面契丹諸部族の間の結束がより強固となつたことは窺はれるが、この傳説の成立が他面既に次第に緊密となつた諸部族の結合を前提として成立したとも見られるのである。

隋書(卷八)契丹傳には、隋初の狀態を記して、

分爲十部、兵多者三千、少者千餘、逐寒暑、隨水草畜牧、有征伐則酋帥相與議之、興兵動衆合符契。

とあつて、當時の契丹諸部の結合は、戰時に於ける攻守同盟的な程度を甚だしくは越えて居ない。又舊唐書(卷一九九下)契丹傳には唐初の狀態を記して

其君長姓大賀氏、勝兵四萬三千人、分爲八部、若有徵發、諸部皆須議合、不得獨舉、獵則別部、戰則同行。

とある。唐初に於いても、戰時に於ける軍事行動に際しては、契丹諸部は單獨行動をなさず、共同行動をなしたことは隋初と同じである。斯る際に諸部を指揮する軍帥の既に出現せるは略推知し得られるが、未だその專斷は許されなかつたことは疑なく、彼等の戰時行動も各その時に際し、諸部の合議を要したものと如くである。されば非常時に於ける臨時的聯合とも目し得べき程度のもので、狩獵等平時の行動は、各部の獨行に任されて居たの

である。然し隋初に於いては分爲十部、兵多者三千、少者千餘とあつて、各部別にその兵數を數へて居るのに、唐初に於いては、勝兵四萬三千人、分爲八部とあつて、八部兵の總數を記して居る。これは唐初に至つて、諸部の兵が一層緊密な共同行動をするに至つたことを物語るものと言へよう。この點より見ても隋初より唐初に至る間に諸部の結合が稍密接になりつゝあつたことを示して居る。而してこの指揮者たる軍帥の稱號も唐初に至つては高句麗貴族の稱號に系統を有する、大賀といふ特別なものを有するに至つたことは、亦諸部結合の次第に密接になりつゝあつたこの間の消息と相應するものと言へよう。

後貞觀二十二年窟哥が松漠都督に任ぜられ、その八部が九州となつて、松漠府に隸せしめられて以後、諸部の結合は以前に増して緊密となり、その指揮者たる松漠都督の權限も、唐の勢力を背景として、俄かに増大したことは、唐の一般異種族に對する羈縻狀態に照して疑ない。然しこれは松漠都督が唐の勢力を背景とした結果生じた特別の現象である。只これが契機となつたことは勿論なるが、眞に契丹諸部が自然發生的にその結合度を著しく増したのは唐末に至つてであらう。唐末の狀態を記したと推せられる趙志忠の虜庭雜記には

凡立王則衆部酋長、皆集會議、其有德行功業者立之、或災害不生、羣牧孳盛、人民安堵、則王更不替代、苟不然、其諸酋會衆部、別選一名爲王、故王以番法、亦甘心退焉、不爲衆所害。

とある。當時契丹の王（大酋長）はその地位に即くには、諸部酋長の合議の選定を要するが、一度其の地位に即くや、災害や牧畜等人民の平常生活の方面にも責任を負ひ、單に軍事のみならず民政的にも、その權限を有するに至つたのである。こゝに至つて諸部の結合は甚だ緊密となり、既に全く聯合體と見るべき狀態となつた。諸部の結束が斯くの如く強固となつて居たとすれば、共同始祖の崇拜祭祀が、當時に於いて行はれたとしても不思議

はないであらう。

以上の如く見來ると、契丹の始祖傳説は天寶末以後成立したもので、これによつて理解されるものは、灰牛白馬や木葉山等に對する *naturism* 的信仰を形式として表現され居る共同始祖尊崇の思想である。その成立した當時の契丹は可突于の變亂の後を受けて、混亂した社會の整理を急務とした時代で、各部族は分散せる舊族員を糾合して、舊時の體裁に復原せしむる必要に迫られ、又乙室活部の如き貞觀以來他の諸部から分離して唐の羈縻州となつて居たものも、諸部と行動を共にするに至つた時である。而してその整理復原の指導精神となつたものは、當時尙契丹の諸部内に殘存して居た同族意識と、祖先崇拜の思想である。多年の紛亂の後には諸部族の形體が整ひ、乙室活部を加へた契丹八部の聯合體結成が能く成し遂げられたのは、この祖先崇拜思想の賜物である。されば共同始祖の尊崇を中心思想とする灰牛白馬傳説は、當時の契丹に於いては社會統制の原則として政治統一の原理として、その存在の意義を有して居たのである。然るに既述の如く同じく灰(青)牛白馬を犠牲とした祭祀でも、建國後に於けるものはその信仰の主たる對象とするものを異にし、天地の崇拜をその根本思想として居る。斯くの如き變化は共同始祖の尊崇祭祀が、その使命を十分に果し得なくなつたことを意味し、拜天思想を主とするにあらざれば、その社會全般の統制は期し得られなくなつたためであらう。

右の如き拜天思想の採用は、木葉山に於ける始祖の祭祀にも現れて居る。遼史(卷四)^(九)、禮志一、吉儀のところには

祭山儀、設天神地祇位于木葉山云々

とあつて、木葉山神は天神地祇であつたやうである。これを地理志(卷三)^(七) 永州の條に

有木葉山、上建契丹始祖廟、奇首可汗在南廟、可敦在北廟、云々

とある記事と参照して考へると、始祖奇首可汗が天神で、可敦が地祇であつたものと思はれる。然しこれは建國後の現象で、灰牛白馬傳説の成立當時に於いては奇首を天神とし可敦を地祇とする思想は、これ程明確ではなかつたもののやうである。前掲契丹國志や東齋記事等支那側の史料に見える始祖傳説には、奇首を一男子とし可敦を一女子とし、地理志永州の條に於けるものは前者を神人とし後者を天女として居る。然るにこれが建國後に於いて天神地祇として祭られるに至つたのは蓋しこの傳説が後述の如く阿保機の諸部大人擊滅以後遼室に採用され當時既に國家の中心祭祀であつた崇天地の思想と合流して、こゝに天神地祇なる意味を有する始祖及び可敦の觀念が成立した爲ではなからうか。遼史^(卷七)瀋欽皇后傳に見える青牛嫗が地皇后となるべき瀋欽皇后に路を避けたとして居る説話童謡が、始祖傳説否定の意義を有して居ることは後述の如くである。遼史はこれに註釋して蓋諺謂地祇爲青牛嫗と言つて居るが、これは編纂者の誤解で實は青牛嫗の神祇化されたのは諸部大人誘殺後八部の始祖傳説を採用し、拜天思想に契丹固有の灰牛白馬の信仰を加味して以後のことと考へられるのである。

三

前述の如く同じく灰牛白馬や木葉山の信仰に於いても建國後に於けるものは天地の崇拜を主要な思想内容として居る。然らばこの變化は何時頃に起つたであらうか。漢高祖實錄には

其王邪律阿保機、怙強恃勇、距諸族、不受代、自號天皇帝、後諸族邀之、請用舊制、保機不得已傳旗鼓、且曰、我爲長九年、所得漢人頗衆、欲以古漢城領本族、率漢人守之、自爲一部、諸部諾之、俄設策復併諸族、

僭稱皇帝、

とある。阿保機の契丹主承襲は、遼史に痕德堇可汗が嗣立して、阿保機が迭剌部夷离堇となつた天復元年で、それより九年後に起つた旗鼓の返還と、その後程ない諸部大人の誘殺は、遼史に所謂阿保機即位の第三年即ち彼の契丹主承襲より九年目の冬十月から翌年秋七月までの、遼史太祖紀が全く記事を缺いて居る間の事で、又中原國家の君主と對等な皇帝を僭稱したのは、舊五代史契丹傳や冊府元龜外臣部が阿保機の帝號を稱した年とし、遼史が天贊元年として居る、後梁龍德二年と見ることの最も妥當なることは、余が曾てこれを主張した如くである。

而してその天皇帝と自號したのもその旗鼓返還の以前で天祐元年の雲中會盟より後のことであると推せられる點から、遼史が阿保機の即位した年として居る後梁開平元年と見るべきであることも、余は曾てこれを論じたところである。遼史(一) 太祖紀、即位第一年のところには

春正月庚寅、命有司、設壇于如迂王集會塙、燔柴告天、即皇帝位、尊母蕭氏爲皇太后、立皇后蕭氏、北宰相蕭轄刺、南宰相耶律歐里志、率群臣、上尊號、曰天皇帝、后曰地皇后

とある。こゝには尊號を天皇帝として居るが舊五代史契丹傳や冊府元龜(卷九)には其國人號阿保機爲天皇帝とあり、虜廷雜記にも自號天皇帝とあり、紀年通譜にも(阿)保機虜中又號天皇帝とある等支那側の史籍には總て契丹國人が阿保機を天皇帝と號したと傳へて居て、天皇帝と稱したと記して居るものは一もない。遼史のこの邊の記事には一般的に作爲の多い事實から見て、こゝに天皇帝とあるのは遼代史家の僞作で、この時の阿保機の稱號は實は支那側のあらゆる史料の一致する如く、天皇帝であつて天皇帝ではなかつたと見るべきであらう。遼代史家は阿保機が後に帝號を稱した事實を逆らせて、實稱なる天皇帝を天皇帝と改めたものと推される。果して然らば

阿保機が天皇王と號したのは遼史の所謂その即位の時と見るのが妥當であらう。されば彼はこの時柴を燐いて天に告げて天皇王と號し、その妻述律氏は地皇后といふ尊號を上られたのであらう。この時柴を燐いて天に告げて天皇王と稱したのであるから明らかに崇天の思想が政治と關聯せしめられて居る事實を認めることが出来る。その稱號天皇王の天なる語も右の崇天の思想と同系統に出づるものと言へよう。

この崇天が政治と結び付いて居る事實は滿洲史に於いては三國時代に既に存在した。魏志の夫餘傳には

以殷正月祭天國中大會、連日飲食歌舞、名曰、迎鼓、於是時斷刑獄、解囚徒。

とあり、又高句麗傳には

以十月祭天、國中大會、名曰東盟、

とあり更に

其國東有大穴、名隧穴、十月國中大會、迎隧穴神、還於國東水上祭之、置木隧於神坐、無牢獄、有罪諸加評議便殺之、沒入妻子爲奴婢、

とある。おそくとも三國時代には夫餘に於いても高句麗に於いても、何れも祭天に際して國民大會を開き、その時に刑獄を斷じ、罪人の處罰を行つたやうである。さればこれ等の祭天には政治的意味を有して居たことは明らかに知られる。然らば當時の政治状態は如何なるものであつたかといふと、夫餘傳には國有君王と記してその國王の存在を示し、又その世系に就いては

尉仇台死、簡位居立、無嫡子、有孽子麻余、位居死、諸加共立麻余、……麻余死、其子依慮年六歲、立以爲王、

と記し、當時の夫餘國王は少くとも簡位居以後は大體に於いて事實上世襲だつたやうである。次に高句麗に就い

て見ても其國有王とあるのも夫餘と同じであるが、その世系に就いては

宮死、子伯固立、……伯固死、有二子、長子拔奇、小子伊夷模、拔奇不肖、國人便共立伊夷模爲王、……伊夷模無子、淫灌奴部生子、名位宮、伊夷模死、立爲王、

とあつて、既に王位世襲の法則は事實上行はれるに至つて居たやうである。而して右の祭天や世系の記事に於いても認められる如く、王の權力も諸加（諸部族の長）によつて甚しく制限せられ、その繼承の如きも諸加の合議によつた場合もあつたやうである。又夫餘傳には

舊夫餘俗、水旱不調、五穀不熟、輒歸咎於王、或言當易、或言當殺、

とあつて、これによつても王の地位は可成り不安定なものであつたことが分る。夫餘高句麗に於ける右の如き状態は契丹に於ける阿保機が天皇王を稱した時代、迭立制の原則が未だ完全には破棄されて居なかつた状態と相似して居る。當時の部族は契丹に於いては阿保機の出身部なる迭刺部の他に八部あるが、夫餘・高句麗に於いては、何れも王族の他には四部で、その數に於いては相違はあるが、これ等が未だ聯合體的性質を滅却して居ない點に於いては何れも同様である。されば當時の契丹の政治状態は三國時代の夫餘や高句麗の状态と比較的近似して居たと見られる。斯く考へて阿保機が天皇王を稱した事實を考察すると、彼が祭天の儀式に立脚してこの稱號を宣したのは、(祭天が主要祭祀であつた三國時代の夫餘や高句麗に於いて君主權が選舉制より世襲制への未だ完全な發達をして居なかつた事情を参照して)、尙迭立制の平等原則が變則的ながら支配して居た當時に於いて、阿保機が君主權の確立を企圖した事實が理解出来る。阿保機はこの時に迭立制を破棄する意圖を宣明したと見られる。前掲漢高祖實錄の記事に怙強恃勇、距諸族、不受代、自號天皇王とあるのも右の如き事情を物語るものである。

らう。斯くの如く解すると阿保機が天に告げて天皇王と自號したことにも相當の理由の存することが推せられる。その理由は次の如きものではあるまいか。

阿保機の篡奪者の君主權の成立を妨げるものは種族的な契丹八部の聯合體を主體として成立した民主的な迭立制である。而してこれは既述の如く始祖崇拜の思想を指導精神として統制された民族的社會であつた。されば契丹種族と共に同族的關係を意識し得ざる明確なる異種族がその政治組織の中に入り來る場合には、その同祖的指導精神に動搖を來すに至るのは當然である。されば既に多くの異種族を包容して居る阿保機時代の契丹社會には自ら異なる指導精神の必要であつたことは想像に難くない。契丹と異種族との關係に就いては遼史は早くからの事實のあつたとを記して居る。

阿保機の四世の祖懿祖が黃室韋に挑戰し(太祖紀贊)伯父の釋魯(述瀾)が北は于厥・室韋を征し、南は奚を略定したこと(同上)、又彼が西伐して黨項吐渾の民を俘して越王城を建てたこと(地理志)、又阿保機の前代の契丹主欽德が達勒奚室韋を驅役したこと(莊宗列傳)遙輦鮮質可汗が奚王吐勒斯を討つてその七百戸を俘したこと(營衛志)、阿保機の父德祖が奚七千戸を俘したこと(太祖紀)、等が傳へられてゐる。これ等のことは遼の傳說時代に屬すること、直ちに歴史事實とは見做し難いが、契丹が異種族を侵略したことは、阿保機の前前代の契丹主習爾(釋魯)、及び前代の欽德時代から可成りに行はれて居たことと認めねばならぬ。これが阿保機時代に至つては、益々盛になつたやうである。遼史太祖紀には阿保機の即位(天皇王と自號した)の年以前に於て、隣境の異種族室韋・烏古・奚・女眞・漢人等を俘掠した記事が頻年見えて居る。而してこれ等が相當の數に上つたことは、室韋や奚の俘掠によつて契丹人と同じやうな部族を編成した事實によつても知り得られる。即ち遼史太祖紀天復三年の條には、

先是德祖俘奚七千戶、徙饒樂之清河、至是創爲迭迭刺部、分十三縣、
とあり、營衛志部族下には

突呂不室韋部、本名大小二黃室韋戶、太祖爲達馬賊沙里、以計降之、乃置二部、隸北府節度使、屬東北路統
軍司云々、

とあり、

迭迭刺達達部、本鮮質可汗所俘奚七百戶、太祖卽位、以十四石烈置爲部、隸南府節度使、屬西南路招討司云々、
とある。又太祖紀天復二年のところに、

秋七月以兵四十萬伐河東河北、攻下九郡、獲生口九萬五千、馳馬牛羊不可勝紀、九月城龍化州于潢河之南、
始開教寺、

とあり、地理志には、

天復二年、太祖爲迭烈部夷離革、破代北、遷其民建城居之、明年伐女直、俘數百戶實焉、天祐元年、增修東
城、制度頗壯麗、

とある。

斯くの如く、契丹がその政治組織の中に多くの異種族を加へるに至つたのは古いことである。これ等の異種族
をもよく統制して行くには契丹種族舊來の同族意識に基く祖先崇拜の思想のみでは不十分なること言ふまでもな
い、新に加入した異種族にも妥當な新しい指導精神の必要となるのは當然である。こゝに於いて採用されたのが
諸種族共通の天崇拜の信仰であつたのであらう。拜天思想は特定なる祖先崇拜に比してより普遍的で包容的であ

る。殊に農耕民たる漢族や奚人に對しては天地の崇拜は最も効果的であつたと考へられる。

政治的祭天を行つた三國時代の夫餘や高句麗も亦その政治組織の中に多くの異種族を包容して居た。高句麗に於いて國小迫於大國之間、遂臣屬句麗、高句麗復置其中大人爲使者、使相主領、又使大加、統責其租稅、貂布魚鹽、海中食物、千里擔負致之、又送其美女、以爲婢妾、遇之如奴僕、(魏志沃沮傳)とある沃沮族や、漢末更屬句麗(同上傳)とある濊族等を含んだことは言ふまでもないが、其國中大家不佃作、坐食者萬餘口、下戸給賦如奴、遠擔米糧魚鹽供給之とある所謂下戸と呼ばれたものゝ中にも同族中の落伍者の他に異種族の含まれて居たことは言ふまでもない。又夫餘に於いても其印文言濊王之印、國有故城、名濊城、蓋本濊貊之地、而夫餘王其中云々、とあつてその支配者と一般民衆とは種族的に相異つて居たやうである。斯く考へると契丹が多くの異種族を包含するに至つて祭天の儀を政治的統一原理として採用したのも高句麗夫餘に於ける場合と同じく契丹諸部以外の異種族の分子が契丹の政治組織の中で重要性を帯びて來たことを意味するのであらう。金に於いても阿骨打が崇天思想を採用したことが明らかに認められるのは鐵利、烏惹、係遼籍女直等を多くその勢力下に置き將に征遼の師を興さんとした時である。(金史世紀)

以上の如く考へ來ると阿保機が天に告げて天皇王を稱するに至つた事情が略理解出來るであらう。

然れどもこの阿保機の祭天の儀には契丹に於いて後に見るが如く青牛白馬を犠牲とせずして支那に於いて古くより行はれた形式を用ひて柴を燐いて告天して居るところに特に注意を要する。

遼史に青(灰)牛白馬を以て天を祭ることの始めて見えて居るのは阿保機即位(天皇王を號す)の第七年諸第の亂の間のことで、この年五月丙寅に既記の如く至庫里、以青牛白馬、祭天地、とあるのがそれである。されば阿保機が青

牛白馬を以て天地を祭るに至つたのは第三、四年の交に於ける諸部大人撃滅以後のことである。而してその翌六月甲申には

（太祖）登都庵山、撫其先奇首可汗遺跡、徘徊顧瞻、而興歎焉

とある。この奇首可汗は所謂契丹八部の始祖である。この八部以外の迭剌部をその出身部として居る阿保機にとつては奇首可汗はその始祖ではなかつた筈である。然るに右の記事に於いて其先即ち阿保機の祖先とし且つ彼がその遺跡を撫して居るのは、當時阿保機が既に八部の始祖傳説を採用したことを物語るものと言へよう。前記の天地を祭るのに、青牛白馬を以てすることは、右の始祖傳説採用と相應するものと考へられる。而してこれは諸部大人撃滅以後に至つて漸く始つたことのやうである。

阿保機が柴を燔いて天に告げて天皇王を稱したのは明らかに支那風儀式の採用であつた。賈緯備史には天祐元年李克用（武皇）との雲州の會盟のことを記して

（阿）保機、謂武皇曰、我蕃中酋長、舊法三年則罷、若它日見公、復相禮否、武皇曰、我受朝命、鎮太原、亦有遷移之制、但不受代則可、何憂罷、保機由此用其教、不受諸族之代、

とあり、又五代史記四夷附錄契丹のところに

漢人教阿保機曰、中國之王、無代立者、由是阿保機益以威制諸部、而不肯代

と言つて居る。天祐元年に李克用からその迭立制の破棄を勧誘され、それより次第にその決心を固めるに至り、遂に開平元年その君主權確立の意圖を明確にしたとすれば、こゝに支那風の影響の現れて居るのも不可解ではなからう。天皇王といふ支那風の稱號を採用した點にもそのことが窺はれ、又直ちに遣使して唐の禪を受けた後梁

にその封冊を求めたところにも、支那風思想の影響の一斑が感知される。されば阿保機の氏族制破壊には少からず支那思想的背景の存したことが認められる。當時の告天の儀に支那古來の形式である燔柴を採用したのも右の如き事情に基くものである。

遼史(卷七) 太祖瀛欽皇后傳に

后簡重果斷、有雄略、嘗至潢土二河之會、有女子乘青牛車、倉卒避道忽不見、童謠曰、青牛姬曾避路……太祖卽位、羣臣上尊號、曰地皇后、

とある。こゝに青牛姬とあるのは始祖傳説に青牛車に駕して潢河を下つたとある一女子を意味するものなること疑ない。この青牛姬が述律皇后のために道を避けたと傳へて居るから、この説話は地皇后となつた述律皇后を青牛姬以上に置かんとするもので灰牛白馬の始祖傳説否定の意圖に出づるものと思はれる。斯く考へると阿保機時代には契丹八部の始祖崇拜の思想を破棄せんと企圖した時期のあつたことが推せられる。而してそれはその記事の順序より見て阿保機が皇帝(實は天皇帝)位に卽き皇后が地皇后と稱せられる直前のことであらう。

斯くの如き情勢であつたから阿保機の天皇帝と稱した思想的背景に支那的色彩の濃厚であつたことも想像出来ることであらう。

三國時代の夫餘や高句麗にも支那的影響の多分にあつたことを参照すると思半ばに過ぐるものがあるであらう。

四

前述の如く阿保機の氏族制破壊には支那思想の色彩が多分にあつた。然し余はこれを以て支那思想と契丹思想

との相剋と見ようとするのではない。こゝに於いて問題となるのは所謂契丹八部の外に在つて發達して來た迭剌部内に於ける篡奪者的社會である。遼史^(卷二)轄底傳には

始臣、不知天子之貴、及陛下即位^(天皇を稱す)、衛從甚嚴、與凡庶不同、臣嘗奏事心動、始有窺覷之意、

とある。轄底は阿保機四世の祖肅祖の孫夷离菀帖剌の子で迭剌部内に於いても世里氏に近親の關係があり、阿保機の伯父釋魯の時代には迭剌部夷离菀として釋魯と二頭政治的關係に在つたと傳へられて居る人物である。彼も遂に窺覷の心を生ずるに至つたのである。斯くの如き迭剌部内に於ける大酋の篡奪窺覷の形勢は古くからあつたやうである。遼史^(卷七)簡獻皇后傳には

玄祖爲狼德所害、后懿居恐不免、命四子往依鄰家耶律臺押、乃獲安、

とあり又耶律鐸臻傳^(卷七)にも

耶律狼德等既害玄祖、暴橫益肆、蒲古只以計誘其黨、悉誅夷之、

とあつて、阿保機の祖父として傳へられて居る玄祖が弑逆に逢つたことを記して居る。阿保機の伯父釋魯の殺害も亦同様な事件であらう。遼史の釋魯が唐史の契丹王習爾と同一人と見ることの妥當なるは余が曾てこれを主張した如くである。

唐書^(卷二)契丹傳には習爾之死、族人欽德嗣とあるのみであるが、遼史には卷四五百官志著帳郎君院の條に、遙輦痕德堇可汗、以蒲古只等三族害于越室魯、家屬没入瓦里、應天皇太后知國政、析出之、以爲著帳郎君娘子、每加矜恤、世宗悉免之とある如く、釋魯の死は順調ではなかつたと思はれる。

釋魯を殺したものとしては遼史の營衛志上^(卷三)及び曷魯傳^(卷七)には、釋魯の子滑哥として居り、又蕭塔剌

葛傳^(卷九)には刺葛の叔父臺晒として居る。滑哥傳には、字斯懶、隋國王釋魯之子、性陰險、初承其父妾、懼事彰、與尅蕭臺晒等共害其父、歸咎臺晒、滑哥獲免とあつて、滑哥が臺晒等と共にその父を謀殺したことにして居る。こゝに臺晒等といふのも蒲古只等三族の中の一人とすれば、營衛志や百官志の記事とも矛盾しない。滑哥は父の妾に通じ、その發覺を懼れて父を殺したといふから、直接手を下したのは彼れかも知れないが、この裏面の事情を知つて居てこれを操り使喚したものは蒲古只・臺晒等三族であつたらうと考へられる。而して蒲古只等は釋魯の政敵であつたのではあるまいか。欽徳は寧ろ蒲古只等の勢力を背景として迭刺部の部長となり、更に契丹王となつたのであらう。

釋魯の殺された時期は、遼史曷魯傳には太祖既長……會滑哥弑其父釋魯とあつて、阿保機の長じてから後のやうである。然しその後の方に太祖爲撻馬賊沙里……とあるから太祖が撻馬賊沙里となつたより以前のことである。唐書契丹傳・莊宗列傳・舊五代史契丹傳・冊府元龜外臣部繼襲等によれば欽徳は光啓中既に契丹主となつて居たやうである。されば習爾の死は遅くとも光啓中のことでなければならぬ。然るに遼史卷一に見える如く、阿保機が咸通十三年に生れたとすれば、光啓中には既に十五六歳であるから長ずるに及びといふ曷魯傳と調和出來ぬこともないであらう。されば釋魯の殺害は光啓中のこととして必ずしも矛盾ではないであらう。

然るに遼史^(卷六)刑法志上には籍沒之法、始自太祖爲撻馬賊沙里時、奉痕德堇可汗命、案于越釋魯遇害事、以其首惡家屬沒入瓦里、とあつて、阿保機が撻馬賊沙里となつた時に痕德堇可汗の命を受けて蒲古只等三族を處罰したと見えて居る。然るに遼史^(卷一)太祖紀によれば阿保機が撻馬賊沙里となつたのは、遼史が痕德堇可汗の嗣立した年とし、余が阿保機の契丹主となつたと推定した年即ち天復元年より以前のことである。而して遼史^(卷九)

蕭塔刺葛傳には太祖時、坐叔祖臺哂謀殺于越釋魯、没入弘義宮とあつて、于越を害した臺哂等の罪せられて弘義宮に没入させられたのは、太祖の時とある。さればこれは大體天復元年頃、即ち阿保機の契丹主繼襲の前後のことと見て支障ないであらう。斯く考へて來れば釋魯の殺害は光啓中のことで、蒲古只等三族の罪せられたのは天復元年頃のこととなり、その犯罪の行はれた時と處罰の時とは非常に隔つて居るやうである。この間は即ち釋魯の反對黨が勢力を張つて居た間であらう。

遼史(卷一) 轄底傳には自立爲夷离堇、與于越耶律釋魯同知國政、及釋魯遇害、轄底懼人圖己、挈其二子迭里特、朔刮、奔渤海、僞爲失明とあつて釋魯の死後その一黨が没落したことが窺はれ、遼史(卷七) 曷魯傳には會滑哥弒其父釋魯、太祖顧曷魯、曰滑哥弒父、料我必不能容、將反噬我、今彼歸罪臺哂爲解、我姑與之、是賊吾不忘也、自是曷魯常佩刀從太祖、以備不虞、とあつて阿保機も亦危險に迫られて居たことが察せられよう。

上述の考察にして誤りなしとすれば釋魯を殺した主謀者は蒲古只臺哂等三族で釋魯の死後契丹王となつた欽徳は天復元年頃蒲古只等三族の處罰と殆ど時を同うして没落し阿保機がこれに代つたのである。されば蒲古只等三族は釋魯の政敵で、欽徳は彼等によつて擁立され世里氏の阿保機が立つに至つて没落したのであらうとの想像は許されよう。

この釋魯一族即ち世里氏の運命は、古代蒙古のデングスカン家のそれに似たところがある。ウラヂミルツォフの研究によると、デングスカンの父イエスゲイバガトゥルは、ラシツド・アデンに殆ど皇帝位に即いた如く見られた人である。彼が或る騎行からの歸途タタル人の酒宴に於いて殺害されるや、イエスゲイの寡婦は氏族の祭祀に参加する權利を拒まれ、遊牧群から離れ、家の者の殆ど全部がタイチウト族に走つた。イエスゲイの遺族、即ち

その妻と幼兒達、少數の男女の家僕の手に残つたものは少數の家畜ばかりであつた。ところがイエスガイの見捨てられた一家は種々な災害の後に陣容を立て直し始めた。長男のテムデンは俊才強剛且つ自制力があつた。テムデンの周圍には若い者共がネケルとなつて集りその氏族の古い隸臣達が集結した。一切の從屬者を持つ古代の氏族が復活された觀を呈し、テムデンはウルフ、ウナガン・ボゴル、ネケル同盟者を持つに至つた。彼は或る者は實力で征服し、他の者は蹂躪された權利を回復することの出來た貴族の家の正主といふ權威で牽きつけた。

世里家の復活はこのテムデン家の復活と相似たものがあつたのではあるまいか。兎に角迭刺部の社會は比較的早くから實力鬭爭的な形勢が支配的となつて居た。阿保機も亦斯くの如き社會に於いて普通に見られる篡奪者の一人であつたのである。

斯くの如く迭刺部に十二、三世紀の蒙古に見る如き實力鬭爭的傾向の濃厚であつたのは、この部が早くから異種族なる奚人を多く容れて、且つその影響のあつたために、比較的農耕性が多くその階級分化が他の契丹八部より早かつたといふ理由に基くのではなからうか。而して習爾・欽德等契丹主がこの部より引き續き出でたとすれば、當時に於ける異種族の俘掠が多く迭刺部の大酋の手に歸して益々階級分化を助長したのは想像に難くない。

然し契丹全體としては未だ迭立制の原則は廢棄されては居なかつた。欽德より阿保機への契丹主の繼承が諸部の承認を経て成つたことは疑ないが、既掲漢高祖實錄の記事に見えるが如く、阿保機が契丹主となつて九年に達するや、諸部大人は彼に旗鼓の返還を迫つた。阿保機はこれに抗し得ず一旦旗鼓を返したが、彼に代つて旗鼓を得たものの名が、この物語に傳へられて居ない點より考へて、この事件は他の篡奪者の人物の實力が阿保機を壓するに至つたために起つたのではなく、諸部大人を動かしてこの行動に出でしめた主動力となつたのは、彼等の

迭立制維持に就いての執着であつたのであらうと思はれる。而してこの迭立制が契丹八部の同族意識を主體とした民主主義的法則であることは固よりである。

斯く考へると迭刺部に於ける實力鬭争的な傾向と契丹舊八部に於ける民主主義的傾向とは對立的な關係に在つたのである。然し阿保機の時までは曲りなりにもこの兩者は能く調和し得て習爾・欽德・阿保機等契丹主が引き續き迭刺部のみから選ばれても諸部大人撃滅の如き事件を惹起せしめずして済んだのである。然るに阿保機の襲位に至りこの對立關係は尖鋭化し遂に最後の破綻に至つたのは漢的思想が阿保機の野望を激化したためではなからうか。(未完)

【註】

- ① 契丹國志(卷二三)建官制度のところには建國後のことを記した記事に、凡民年十五以上五十以下、皆籍爲兵、將舉兵必殺灰牛白馬、祀天地及木葉山神、鑄金魚符、調發兵馬とある。太平御覽所引魏略には高句麗に關し有軍事亦祭天、殺牛觀蹄、以占吉凶、とある。この祭天には牛を殺して蹄を觀て吉凶を占つて居る。契丹の青牛白馬の犧牲にも斯の如き占の意味があるのではないかと疑はれるが、契丹には軍事のある時吉凶を占ふ方法は他にもある。即ち遼史拾遺(卷一三)所引燕北雜記にも又これによつた契丹國志(卷二七)歲時雜記行軍のところにも契丹人が行軍の際、日を擇ばず艾を馬糞に和し、白羊の髀髀骨の上にてこれを炙り、骨破れると出行し、破れずんば出で行かないと記して居る。

- ② 契丹國志初興本末は灰牛白馬の始祖傳説の後に續けて唐末契丹に行はれたと推せられる説話を記して後有一主、號曰酒呵此主特一髑髏、在穹廬中、覆之以氈、人不得見、國有大事、則殺白馬灰牛以祭、始變人形出視、事已即入穹廬、復爲髑髏因國人竊視之、失其所在云々とある。建國以前に於いては契丹に大事のあつた時に青牛白馬を殺して祭るのは一祖先とも解すべき古酋長で天地ではなかつたことを物語つて居る。

灰牛白馬や木葉山に對する契丹人の信仰は、それが單なる庶物崇拜的のものとしては、餘程古くからあつたであらう。殊

に木葉山に對するものは、彼等の住地がこれと何等かの關係を有するに至つた當初からあつたことは、想像に難くない。契丹人が木葉山や潢水・土河合流地方に居住するに至つたのは、後くとも隋末唐初突厥の支配下に在つた時代からであることは、余が曾て主張した如くである。(東洋史研究、二ノ五頁八一、註④、史林二三ノ一、頁一四八註⑥) されば木葉山に對する庶物崇拜的信仰は、少くともその當時までは逆り得るであらう。この契丹人の木葉山の信仰は祖先崇拜と合流したのみならず太宗時代に至つては支那式な觀音の信仰とも結びついた。遼史(卷四九)吉儀祭山儀のところには太祖(太宗の誤)幸幽州大悲閣、遷白衣觀音像、建廟木葉山、尊爲家神、於拜山儀、過樹之後、增詣菩薩堂、儀一節、然後拜神、非胡刺可汗之故也とある。

③ 外務省調查部譯、蒙古社會制度史、頁三五及び頁五七、

④ 十七史商榷卷七九

⑤ 史林、二三ノ一、拙稿「魏初に於ける契丹勿吉間の諸部族に就いて」を讀む、頁三三—三六

⑥ 東洋史研究、一ノ五、拙稿、橋本增吉氏の「遼の建國年代に就いて」を讀む、頁三三—三六

⑦ 契丹國志(卷二三)宮室制度にも凡受冊積柴、升其上、大會蕃夷其下、已乃燔柴告天、而漢人不得預とある。この記事は前後の關係より考へて太祖時代のことを傳へたものと思はれる。太宗以後の即位に際し行はれる柴冊再生儀は禮志(卷四九)吉儀を見ると薪を積んで日を拜したもののやうである。これは遙輦氏阻午可汗の制とされ(禮志序)建國以前には迭刺部夷离董となるものがこれを行つたとされて居る(卷一一二輶底傳)

⑧ 三國志魏志の傳にも、常用十月節祭天、晝夜飲酒歌舞、名之爲舞天、又祭虎以爲神とある。高句麗や夫餘と同系統の濊種族にも虎を祭ると共に天を祭つた事實を傳へて居る。然るにこの種族に就いては無大君長とあつて政治的大統一のなかつたことが分る。右の祭天も未だ政治的統一に關聯を有たなかつたのであらう

⑨ この鮮質可汗が討つたといふ奚王吐勒斯は唐書(卷二一九)奚傳に、咸通九年其王突董蘇、使大都督薩葛入朝、是後契丹方強、奚不敢亢、而舉部役屬、虜政苛、奚怨之、其酋去諸引別部內附、保嬀州北山、遂爲東西奚とある奚王突董蘇と同一人のやうである。されば彼は咸通末に契丹主となつた阿保機の伯父の習爾と同時代の人で從て唐末回紇の支配下に於いては

却て優勢だつた奚が、遂に契丹の下風に立つに至つたのは習爾(釋魯)時代からのこと、考へられる。

⑩ 東洋史研究、二ノ五「遼の建國に就いて」頁四二—四三

⑪ 東洋史研究、二ノ五、拙稿遼の建國に就いて 頁三一—三五、

⑫ 痕德董可汗は實在の人としては、光啓中から天復元年阿保機の立つまでの間の契丹主であつたが、遼史遼聖氏の傳説に於いては、九世可汗の最後として、阿保機の襲位した唐天復元年よりその天皇王と自號した後梁開平元年までの契丹主で阿保機はその禪を受けて契丹皇帝位に即いた如くなつて居る。然しこれは阿保機の篡奪者的君主權獲得を蔽つて支那的に合法化せんとした遼代史家の作爲であることは勿論である。(東洋史研究、二ノ五頁三一—三五、註⑩)

⑬ 迭剌部が、多分に奚を包含し、開元末頃から今のシラムレンの北方に居た部族であることは、余が曾てこれを主張した。

(東洋史研究、二ノ五頁四二)然るに奚はその當時より農耕をなして居たことは、次の記事によつて明らかに知られる。即ち舊唐書(卷一〇三)張守珪傳には開元二十六年守珪裨將、趙堪白眞陁羅等、假以守珪之命、逼平盧軍使烏知義、令率騎邀叛奚餘衆於遼水之北、將踐其稼、知義初猶固辭、眞陁羅又詐稱詔命以迫、知義不得已而行、及逢賊、初勝後敗、守珪隱其敗狀、而妄奏克獲之功、事頗泄とある遼水(今のシラムレン)の北の奚即ち契丹人と合して迭剌部を成した奚は開元二十六年頃から既に農耕をなして居たことが分る。

一般奚の農耕性は契丹國志(卷二二)四京本末中京のところに由古北口至中京、北皆奚境、奚本與契丹等、後爲契丹所併、所在分奚契丹漢人渤海奚處之、奚有六節度都省統領、言語風俗與契丹不同、善耕種、步射、入山採獵、其行如飛とある。又唐末に琵琶川(今の太凌河)から媯州(今の懷來)に遷徙した西奚が農耕を善くしたことは、五代史記・四夷附錄の西奚に關する記事によつて明らかに知られる。

右の事實より考へて迭剌部が奚を多分に含んで居たとすれば、その農耕性の多かつたことは想像に難くないが、更に契丹上代の農耕に關することは、涅里、玄祖、釋魯等に就いてのみ傳へられて居る(遼史太祖紀贊、食貨志上、百官志二)ことから推せられる。